

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520645

研究課題名(和文) 20世紀初頭フランスの歴史論争に関する研究

研究課題名(英文) Research of the Methodenstreit of History in France in the early 20th Century

研究代表者 渡辺 和行 (WATANABE KAZUYUKI)

奈良女子大学・文学部・教授

研究者番号：10167108

研究成果の概要(和文)：19世紀後半のフランスで、科学としての歴史学を樹立した実証主義史学(モノーやラヴィス)が、高等教育機関を制覇して歴史学の制度化をなし遂げた世紀転換期に、新興科学の社会学(フランソワ・シミアン)と伝統科学の哲学(アンリ・ベール)から2つの批判が放たれた。こうして、社会学者(デュルケーム)と歴史家(セニョボス)との20世紀初頭の方法論争が展開された。この方法論争を整理することで、アナル学派という20世紀の社会史学派が誕生する背景が解明できた。

研究成果の概要(英文)：In the second half of the 19th century, School of Positivist History, represented by Gabriel Monod and Ernest Lavisse, had established the scientific history and achieved the institutionalization of course of history in higher education in France. However, Positivist Historians met with two severe criticisms from Sociologist François Simiand and Philosopher Henri Berr in the turn of the century. Thus “Methodenstreit” began between sociologists and historians. By studying this “Methodenstreit” we would know the birth of School of Annales in the early 20th century.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：歴史学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：実証主義史学、アナル学派、方法論争、歴史学の制度化、歴史学の科学化

1. 研究開始当初の背景

(1)わが国でも1980年代に社会史ブームが起き、イギリス・フランス・ドイツの社会史研究の翻訳や社会史の方法の紹介が相継いだ。それには、1970年代のマルクス主義パ

ラダイムの影響力の低下と戦後歴史学の行き詰まりという状況が背景にあり、社会史パラダイムへの関心が、西洋史研究者だけではなく日本史研究者のあいだにも俄然高まった。

(2)周知のように、20世紀後半の歴史学界で社会史を牽引したのは、フランスのアナール学派であった。アナール学派は、第一世代のリュシアン・フェーヴルとマルク・ブロック、第二世代のフェルナン・ブローデル、第三世代のジャック・ルゴフやエマニュエル・ル・ロワ・ラデュリ、第4世代のジャック・ルヴェルやアンドレ・ビュルギエール、ロジェ・シャルチエといったように、常に世界的に著名な歴史家を擁して、全世界の歴史研究者に大きな影響を与え続けていた。わが国でも、イギリスやドイツの社会史よりはフランス社会史の方法に関する紹介が群を抜いて多かったのも、それを証明している。

(3)しかし、フランスになぜ社会史学派が登場したのかという深層にまで降り立った史学史研究は、わが国には不在であった。比喻を用いれば、社会史という花(=成果・結果)のみの移植に急であり、社会史を産み出した土質の吟味(=過程)はおざなりになっていた。これでは、明治以来の輸入学問の旧套を抜け出すことはできず、方法論の吟味を伴わない移植では、社会史の方法が真にわが国に根づくことはなく、良くて切り花か鉢植え程度のものに終わってしまいかねない虞があった。

(4)以上の状況が、研究開始当初の学術的背景と私のライトモチーフである。こうしたアイデアを得るには、私が、アナールが批判した政治史を専攻し、しかも、社会史の本場であるフランスを研究対象にしているということが大きかった。

2. 研究の目的

(1)私の研究目的は、アナール学派の実態や研究手法、敷衍すると、社会史の方法の解明にあるのではなくて、なぜ、フランスにアナール学派という社会史学派が登場し、フランス社会史が世界の歴史学のヘゲモニーを掌握するに至ったのかを解き明かすことであった。すなわち、19世紀の政治史から20世紀の社会史へのパラダイム転換として、それを考察することであり、そこにはいかなる学術的な背景と駆動力があったのかを明らかにすることであった。

(2)そのために、アナール学派が批判の対象とした政治史学派としての実証主義史学、19世紀後半に成立したフランス歴史学派の実態を解明することが何よりも重要課題として浮上した。アナールが批判の対象とした実証主義史学については、わが国はもとよりフランス本国においても本格的な研究対象とはなっていなかった。それは、リュシアン・

フェーヴルの実証主義史学批判の言説が鵜呑みにされ、フェーヴルの言説の妥当性について検証が行われてこなかったことの現れである。彼の言説に対しても、歴史批判が求められている。

(3)確かに、実証主義史学は政治史学であり、アナール学派に批判されたような限界も持っていた。フェーヴルは、実証主義史学を「1870年の敗者の歴史学」であり、「総合の放棄」と「勤勉ではあるが知的には怠惰な《事実》崇拝」と「外交史偏重」を特徴としていたと論難した。

(4)しかるに、実証主義史学はフランスに科学(=学問)としての歴史学を誕生させ、高等教育機関の歴史研究を活性化させて、フランスの歴史学の発展と、歴史教育を通じた共和主義的な国民形成に多大な貢献をしていた。1870年以前のフランス歴史学とは、宗派的党派的哲学的な歴史書が多く、これらと実証主義史学の違いは一目瞭然であった。それゆえ、実証主義史学の功罪も含めた全体像を提示することで、政治史から社会史へのパラダイム転換がよりクリアカットになることに気づいた。

(5)かくして、私の史学史研究の方向が定まった。その方向とは、1870-1914年のフランス歴史学を、「科学化・制度化・国民化・方法論争」のキーワードでおさえることによって、政治史から社会史へのパラダイム転換を把握することであった。

3. 研究の方法

(1)政治史から社会史へのパラダイム転換を解明するために、実証主義史学の分析方法として、次の2つのアプローチを採用した。

①歴史学の科学化・制度化・国民化の過程を解明する。

②19世紀末から20世紀初頭の方法論争を分析し、政治史から社会史へのパラダイム転換を解明する。世紀転換期の方法論争を横目で見やりながら、歴史研究者になるための徒弟修業をしていたのが、アナール第一世代のフェーヴルとブロックであった。

(3)歴史学の制度化と科学化とは同時に進行するので、フランスの高等教育の実態を明らかにし、教育制度改革の一環として歴史学の改革、つまり歴史研究の科学化と歴史学講座の増設や歴史教育の必修化などによる制度化が進んだことを確認する。

(4)普仏戦争の敗因は、ドイツの学校・学制・学問に負けたことにあると総括され、ドイツの学制を取り入れつつ、同時にドイツの歴史学=ランケ史学の方法、文献学的歴史学

が導入された。すなわち、前期第3共和政の共和派と大学人との連合によって、歴史学の科学化と制度化が図られた、歴史研究や歴史教育の刷新と大学における歴史学講座の増設が進められた。その経緯をガブリエル・モノーとエルネスト・ラヴィスの「歴史のための戦い」から明らかにする。

(5)凱歌を挙げたモノーやラヴィスの歴史学＝実証主義史学が19世紀末に2つの批判に晒され、歴史学をめぐる方法論争が展開されたことを、20世紀初頭のシンポジウムなどを通して明らかにする。

(6)19世紀後半の実証主義史学は、ナショナル・ヒストリーの構築にも関与し、折からの初等教育の義務化とあいまって、共和国の市民育成の課題をも担ったことを、初等教育で用いられた歴史や道徳の教科書分析を通して明らかにする。つまり、歴史学がフランス人の国民形成に大きく関与した様子を、歴史教科書に描かれたフランスの英雄像（ウェルキンゲトリクス、アンリ4世、ジャンヌ・ダルク、ナポレオン etc.）を分析して解明する。

4. 研究成果

全体の構想や問題意識や研究手法は上述したとおりであるが、研究成果としては、本科研費の研究課題である歴史論争に関わる点について詳述しよう。それ以外の点については、拙著『近代フランスの歴史学と歴史家—クリオとナショナリズム—』（ミネルヴァ書房、2009）を参照していただきたい。

(1)19世紀末の実証主義史学に対する2つの批判を再確認した。

①新興の社会科学としての社会学からの批判（エミール・デュルケームとフランソワ・シミアンの批判）。とりわけ、実証主義史学に対してシミアンが1903年に放った批判、「政治・個人・年代記のイドラ」批判が重要であった。

②伝統的な人文科学としての哲学からの批判をアンリ・ベールの歴史学批判を中心としつつ、その他の哲学者による認識論的問題をめぐる議論を合わせて分析した。とくに、全体を見失って無意味な細部に拘泥する歴史学に対して、総合を求めるベールの批判が核心を突いていた。

(2)これらの2つの批判を解明することで、世紀転換期の歴史論争の背景が理解でき、方法論争を長期的な展望の下に位置づけることができた。同時に若手歴史研究者のあいだには、デュルケームやベールの主張に対する

共感が高まっているのも確認できた。

(3)その上で、20世紀初頭フランスの歴史論争、1903年と1906-08年にかけて行われた歴史学と社会学の方法論争について次の5点を解明した。

①社会学者、とくにシミアンとデュルケームの批判に晒された実証主義史家のなかに反省の気運が生まれたこと。それはモノーの1896年の講演や20世紀初めの論説に明らかであった。

②ドイツで展開されたランプレヒト論争に対するフランス史家の反応を解明することで、20世紀の歴史学の発達における仏独の分岐点が明らかとなった。ドイツではランプレヒトは孤立無援であったが、フランスからはランプレヒト史学（経済史や文化史）に共感が示された。つまり、新カント派の峻別論に依拠して、方法二元論の立場を取る新ランケ派が優位するドイツと、学際性を推進して方法一元論の立場を取るフランスとの差異が、社会科学や自然科学にも開かれたフランス歴史学を育てていったのである。

③シミアンのセニョボス批判への反響を探ることで、防戦に立たされた歴史家の対応や社会学者の主張に親近感を抱く歴史家の存在など、歴史学会に生じた波紋の広がり解明できた。

④セニョボスの歴史論や社会科学観およびその問題点などが分かった。セニョボスは、フランス史家のなかでも認識論や方法論にも関心を持った数少ない歴史家であったが、彼の社会科学観は狭いものであることが判明した。

⑤かくして、20世紀初頭のフランスで、歴史家と社会学者の論争の舞台が整った結果、1903年と1906-08年に連続講演会やシンポジウムが開かれた。歴史学を代表したのは、旧世代とも言うセニョボスであり、彼がシミアンやデュルケームと対峙した。そこで繰り広げられた歴史学と社会学との方法論争を整理し、19世紀後半から20世紀初頭のフランス史学史に位置づけることを通して、アナールの揺りかごの一端が解明できた。

第一世代の実証主義史家モノーは、フェーヴルの博論指導教官であり、第二世代の実証主義史家セニョボスは、マルク・ブロックの博論指導教官であったように、実証主義史学からアナールに至る道には、断絶と同時に連続もあったことが解明できた。

以上の研究成果については、渡辺和行『20世紀初頭フランスの歴史論争に関する研究』（科研費補助金、研究成果報告書、2011）に

詳述されている。内容は次のようである。

- 第1章 フランス実証主義史学への挑戦
- 第2章 世紀転換期フランスの方法論争
- 第3章 歴史学の現在

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①渡辺和行、ポストモダンの社会史と「アナーール」、『思想』、査読有、1012号、2008年、29-51頁。

[学会発表] (計5件)

①渡辺和行、文化革命としての人民戦線、関西フランス史研究会、2011年1月8日、キャンパスプラザ京都

②渡辺和行、コメンテーター、日仏政治学会、2010年12月18日、奈良女子大学

③渡辺和行、なぜユダヤ人は迫害されたのか?、関西大学人権啓発行事、2010年5月25日、関西大学

④渡辺和行、「アナーール」の揺りかご、関西フランス史研究会、2009年4月11日、京大会館

⑤渡辺和行、コメンテーター、比較教育社会史研究会、2008年3月28日、関西学院大学

[図書] (計3件)

①渡辺和行『20世紀初頭フランスの歴史論争に関する研究』科研費補助金 研究成果報告書、2011年、139頁。

②渡辺和行『近代フランスの歴史学と歴史家』ミネルヴァ書房、2009年、446頁。

③土倉莞爾、渡辺和行、他2名訳、トニー・ジャット『知識人の責任』晃洋書房、2009年、31-98、221-229頁。

[その他]

(1) 書評

①渡辺和行、『歴史と経済』第210号、2011年1月、64-66頁(立石博高・篠原琢編『国民国家と市民—包摂と排除の諸相』山川出版社)。

②渡辺和行「フランス人民戦線とヴィシー時代の研究紹介」『歴史と地理—世界史の研究』225号、2010年11月、42-46頁。

③渡辺和行、『図書新聞』2919号、2009年5

月30日(ジャン=ポール・デュボワ『フランスの人生』筑摩書房)。

④渡辺和行『西洋史学論集』第46号、2008年12月、121-125頁(松沼美穂『帝国とプロパガンダ』山川出版社)。

⑤渡辺和行、『公明新聞』2008年7月21日(ハンナ・ダイヤモンド『脱出』朝日新聞出版)。

⑥渡辺和行「回顧と展望—ヨーロッパ現代一般」『史学雑誌』第117編第5号、2008年、363-365頁。

(2) その他

①渡辺和行「動かざる歴史」奈良女子大学文学部なら学プロジェクト編『大学的奈良ガイド』昭和堂、2009、194-195頁。

②渡辺和行「バルビー裁判とフランス」『敵こそ、我が友』パンフレット所収、2008年7月。

③渡辺和行、映画「敵こそ、我が友」監修協力、2008年3月。

(3) ホームページ

冊子体の研究成果報告書が、奈良女子大学付属図書館のホームページにある「奈良女子大学学術情報リポジトリ」からダウンロードできる。

<http://www.nara-wu.ac.jp/dspace/index.jsp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 和行 (WATANABE KAZUYUKI)
奈良女子大学・文学部・教授
研究者番号：10167108

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし